

## 高木元先生を送る

大原 祐治

高木元先生は二〇〇〇年四月に千葉大学文学部へ着任されて以来、十五年の長きにわたり、研究・教育その他、校務全般において、常に日本文化学科の中核を担ってきた。そして、定年退職にはまだ時間を残した二〇〇五年三月、惜しまれながら大妻女子大学文学部へと移られた。突然伝えられた異動の話に、われわれ学科・講座のメンバーが受けた打撃はとて大きかったが、それは、われわれが高木先生から受けた恩恵の大きさを物語っている。

筆者自身が千葉大に着任したのは二〇〇九年のことなので、直接存じ上げているのは最近の六年ほどしかないが、ご本人からの「口伝」も含めて、この十五年間に高木先生がさまざまな場面で大きな役割を果たしてきたことを、実に多くの方から耳にしてきた。

着任と同時に学生委員長を務められたのを皮切りに、情報委員長、教務委員長、広報委員長といった職務を次々に担われ、また日本文化学科の学科長も二度にわたって務められている。とりわけ、情報処理関係の事柄について詳しいこともあって、在職中は学部内のサーバ管理といった業務に常に気を配って下さり、学生たちの使用する機器のIT環境にまで細やかな対応をいただいていた。

また、学科や講座の中で大きささまざまな問題が生じたとき、いつも全体を見渡し、時に厳しい意見を口にしながら学科・講座の向かうべき筋道を明確に示して下さっていたことも忘れられない。「近頃の若い人はすぐに納得してしまって、疑問を懐き（闘う）姿勢を見せることが少ない」と苦言を呈されることもあったが、今にして思えば、常にご自身が楯になって年少世代の同僚を守ろうとして下さっていたのだ、という場面ばかりが思い起こされる。学生運動のピークよりは少し後の世代に属されるはずではあるが、黒々とした長髪をなびかせながら「吠える」お姿は、諦念に流されがちな国立大学の職場の中で大きな意味を持つものであったということをも、つくづく思い知るこの頃である。

一方、授業を通して学生たちに見せる顔は、また違ったものだった、ということも伝え聞くところである。徹底して書物そのものと向き合う、そのストイックな研究スタイルとは対照的に、授業では常々アツク「愛」を語っていた、とは卒業生が口を揃えて証言するところである。筆者も共に関わった普遍コア科目（リレー講義形式）のテーマを決めるに際しても、全体をコーディネートしてくださった高木先生が率先して提示したのが「〈愛〉の文学」（！）というタイトルだったことは忘れられない。きっと授業ではいつも、書物への愛、文学への愛を語ると共に、文学作品の中に描かれた愛のかたちについて、豊富な人生経験を踏まえたお話をされていたのだろう。夏の日本文化学会の折などに、卒業生が先生を慕ってやってきて、楽しみに久闊を叙していた場面も何度か目にした。ご本人もしばしばおっしゃっていたが、何か悩みを抱えていたり、漠然と「生きづらさ」のようなものを感じていたりする学生たちは、しばしば高木先生の研究室に引き寄せられ、ドアをノックしていたようである。彼らにとつての高木先生は、学問上の師であるとともに（そしてそれ以上に）、人生の師でもあったのだろう。

とはいえ、とりわけ大学院の授業では、しばしばそうした文学への「愛」を一度封印し、「研究」の厳しさを叩き込む、という顔も見せていらつしやつたようで、近代文学を専攻するつもりで大学院に進学してきた私の指導学生などは、しばしば授業で厳しくご指導いただいたようである。書物そのものに向き合い、文字情報のナイーヴな読解に留まることなく、さりげなく刷り込まれた細かな画像情報などにまで細心の注意を払って考察すること、また、その書物がどのようなプロセスを経て造りだされ、何者が介在中で流通していくのか、ということにまで注意を向けること等々、どれも文学を研究する上では最も重要なことばかりであるが、長らくこうした点について徹底してこだわり、着実に研究実績を積みかさねてこられた高木先生から諭されることで、大学院生たちはその重みをひしひしと感じ取ることができたことであろう。人社研の修了生たちの中には、こうした高木先生の薫陶を受けながら、教育・研究職に就いている人々が数多くいるはずである。

高木先生のご研究は、ご自身が常々看板として掲げられていた「十九世紀文学研究」という言葉に体现されている。近世／近代という時代区分によって分断され、次第にタコツボ化の様相を呈し始めていた日本文学研究の世界に風穴を開けようとする、そのダイナミックな視座はきわめて画期的なものだった。政治史的な区分にとらわれることなく、また、作品論／作家論的な枠組みからも遠く離れ、作者・板元・読者の関係を実証的かつ立体的に捉える視座に立った研究は、狭義の文学研究に留まることなく、出版史研究・書誌学研究としての広がりを持つものである。こうした新しい日本文学研究のスタイルは、長らく委員を務めておられる国文学研究資料館の研究プロジェクト等を通して、多くの文学研究者に共有されることもなり、ご自身も呼び掛け人の一人として関わる「十九世紀文学研究会」の活動へと結実している。

また、こうしたご研究の成果は日本国内のみならず、海外においても注目される場所であった。精力的にフランスやロシアに足を運び、海外で保存されている諸資料を調査すると同時に、そうした調査の成果を踏まえ、海外の学会等での発表・講演に精力的に取り組みされており、論文がフランス語訳されて当地の専門的な学術誌に掲載されたこともある。「グローバル」な視座が求められる今日における人文学の趨勢の中で、専ら調査・研究対象を日本語文献としている日本文学研究は、その成果をいかにして外部に向けて発信するのか、ということも根源的に問われることが少なくないが、高木先生のご研究はそのような要請に対しても軽々と応えてみせるものだったと言えるだろう。

高木先生が千葉大学を去られたいま、日本文学を専攻する残りのスタッフは奮戦を求められる場面が少なくない。折から進行している大学改革の急流の中で、今後、難しい局面が出来ることもあるかもしれない。しかし、同じ学部・学科・講座の一員として教育研究に携わる中で示していただいたことどもは、しっかりと受け継いでいきたい。安易な選択に流されることなく、守るべきものをいかにして守るのか、ということをも、いつも身をもって示して下さったお姿を、残されたスタッフでしっかりと引き継いでいきたいと思う。

大妻女子大学に移られてからも、高木先生は引き続き日本文学研究を牽引していくお立場である。国立大学から私立大学へ、しかも女子大学へのご異動ということで、環境の変化は大きく、また校務も決して少なくないのだというお話をご本人からうかがったが、〈闘志〉と〈愛〉に溢れた高木先生は、新天地においても研究に教育に、いっそう邁進されることと思う。これまでのご尽力に心から感謝しつつ、今後のご発展を心より祈念して送る言葉とさせていただきます。

## 高木元先生 略歴

一九五五（昭和30）年一月一七日生まれ 東京育ち

### 学歴

- 一九七三（昭和48）年三月 東京都立大学附属高等学校 卒業
- 一九七四（昭和49）年四月 東京都立大学経済学部入学
- 一九七五（昭和50）年四月 同 人文学部文学科（国文学専攻）転学部
- 一九七九（昭和54）年三月 同 卒業
- 一九八五（昭和60）年四月 東京都立大学大学院人文科学研究科入学
- 一九八七（昭和62）年三月 同 修士課程（国文学専攻）修了
- 一九八七（昭和62）年四月 同 博士課程入学
- 一九九〇（平成2）年三月 同 単位修得満期退学
- 一九九四（平成6）年一月 博士（文学） 東京都立大学

### 職歴

一九七九（昭和54）年四月 明治学院東村山高等学校教諭 兼 明治学院中学校教諭（一九八五年三月まで）

高木元先生を送る

一九九〇（平成2）年四月 愛知県立大学文学部講師 兼 愛知県立女子短期大学講師（一九九三年三月まで）  
一九九三（平成5）年四月 愛知県立大学文学部助教授 兼 愛知県立女子短期大学助教授（二〇〇〇年三月まで）

二〇〇〇（平成12）年四月 千葉大学文学部教授（二〇一五年三月まで）

二〇一五（平成27）年四月 大妻女子大学文学部教授（現在に至る）

〈非常勤〉

名古屋大学文学部、南山大学文学部、椙山女学園短期大学部、立正大学文学部、共立女子大学大学院文芸学研究院、共立女子大学文学部、熊本県立大学文学部（集中講義）、日本女子大学大学院文学研究科、成城大学大学院文学研究科、放送大学、学習院大学大学院人文科学研究科、駒澤大学文学部、横浜市立大学（全学科目）、法政大学大学院人文科学研究科、奈良女子大学文学部・大学院人間文化研究科（集中講義）、東京大学教養学部等。

## 業績目録

### I 著書

- 1 『中本型読本集』（叢書江戸文庫25）（一九八八年一月、国書刊行会、四二五頁）
- 2 『江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷―』（一九九五年一〇月、ぺりかん社 五七五頁）

## II 共著・編著

1 『日本大学総合図書館蔵 馬琴書翰集』（二九九年一月、八木書店、二八〇頁）\*大澤美夫氏・柴田光彦氏との共編校）

2 『山東京山伝奇小説集』（江戸怪異綺想文芸大系4）（二〇〇三年一月、国書刊行会、一〇四六頁）

3 『開化風俗誌集』（新日本古典文学大系《明治編》1）（二〇〇四年二月、岩波書店、四四三頁）

## III 学位論文

「江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷」（博士論文）（一九九四年一月、東京都立大学大学院人文科学研究科（人博第55号））

## IV 学術論文

1 「『松浦佐用媛石魂録』論」（『日本文学』一九八〇年一月、56―66頁）

2 「『松浦佐用媛石魂録』の諸版本」（『都大論究』一九八〇年四月、19―31頁）

3 「中本型読本の展開」（『読本の世界―江戸と上方―』第三章 世界思想社、一九八五年七月、132―15頁）

4 「感和亭鬼武者編述書目年表稿」（『研究と資料』一九八五年七月、69―80頁）

5 「鳥山瀬川の後日譚」（『都大論究』一九八六年三月、111―115頁）

6 「中本型読本書目年表稿―天保期まで―」（『近世文藝』一九八六年六月、55―75頁）

高木元先生を送る

- 7 「末期の中本型読本―所謂「切附本」について―」（『近世文藝』一九八六年一月、49―69頁）
- 8 「末期中本型読本書目年表稿―弘化期以降―」（『近世文藝』一九八七年六月、55―76頁）
- 9 「江戸読本の形成―貸本屋の出版をめぐる―」（『文学』一九八八年九月、65―85頁）
- 10 「『画像神史外題鑑』について―文化期江戸読本書目年表稿―」（『読本研究』一九八九年九月、177―215頁）
- 11 「読本の書誌をめぐる―」（『読本研究』一九九〇年六月、142―156頁）
- 12 「戯作者たちの「蝦蟇」―江戸読本の方法―」（『江戸文学』一九九〇年十一月、125―140頁）
- 13 「江戸読本享受史の一断面―明治大正期の翻刻本について―」（『愛知県立大学文学部論集（国文学科編）』一九九二年二月、1―37頁）
- 14 「馬琴の中本型読本―改題本再刻本をめぐる―」（『読本研究』一九九一年九月、93―107頁）
- 15 「山東京山著述書目年表稿（一）―短編読切合巻―」（『愛知県立大学文学部論集（国文学科編）』一九九二年二月、43―67頁）
- 16 「読本の校合―板本の象嵌跡をめぐる―」（『読本研究』一九九二年九月、199―216頁）
- 17 「化政期出版界に於ける〈雑家〉―島岡権六の場合―」（『江戸文学』一九九二年一〇月、37―60頁）
- 18 「草双紙の十九世紀―メディアとしての様式―」（『国語と国文学』一九九三年五月、58―66頁）
- 19 「意味としての体裁―俊徳丸の変容―」（『見えない世界の文学誌』一九九四年三月、ペリカン社、95―112頁）
- 20 「江戸読本の新刊予告と〈作者〉―テキストフォーマット論覚書―」（『日本文学』一九九四年一〇月、22―

- 21 「桜姫全伝曙草紙等の〈清玄〉」〔国文学〕一九九五年六月、136—137頁
- 22 「書肆・貸本屋の役割」〔岩波講座 日本文学史〕10〔19世紀の文学〕、一九九六年四月、245—265頁
- 23 「山東京山著述書目年表稿（二）——長編合巻——」〔説林〕一九九八年三月、45—74頁
- 24 「草双紙・読本の雅俗——黄鳥墳説話の諸相——」〔国文学〕一九九九年二月、42—48頁
- 25 「近世後期小説受容史試論——明治期の序文集妙文集をめぐる——」〔明治の出版文化〕二〇〇二年三月、臨川書店、80—139頁
- 26 「『水滸後画伝』致—草稿本をめぐる——」〔読本研究新集〕二〇〇四年一〇月、241—267頁
- 27 「鈍亭時代の魯文」〔社会文化科学研究〕二〇〇五年九月、1—23頁
- 28 「魯文の売文業」〔国文学研究資料館紀要 文学研究篇〕二〇〇八年二月、141—176頁
- 29 「江戸読本に見る造本意識」〔アジア遊学〕二〇〇八年四月、113—124頁
- 30 「魯文の艶本」〔国文学研究資料館紀要 文学研究篇〕二〇〇九年二月、115—153頁
- 31 「八犬伝の後裔」〔日本のことばと文化—日本と中国の日本文化研究の接点〕二〇〇九年一〇月、溪水社、225—246頁
- 32 「十九世紀の草双紙」〔文学〕二〇〇九年一月、4—15頁
- 33 「読本に於ける挿絵の位相」〔国文学 解釈と鑑賞〕二〇一〇年八月、81—88頁
- 34 「二代目岳亭の遺業」〔人文社会科学研究〕二〇一一年九月、16—29頁
- 35 *L'illustration des romans populaires au Japon aux XVIIIe et XIXe siècles* "Arts Asiatiques" Vol. 66 Musse

高木元先生を送る

Gumet et EFOE (2011) pp. 27-46

- 36 「書物(テキスト)のリテラシー―板本は読んでいるか―」〔日本文学〕二〇一三年四月、10―22頁)
- 37 「江戸読本の往方―巴里に眠る読本たち―」〔読本研究新集〕二〇一四年六月、169―181頁)
- 38 「ギメ美術館蔵「読本挿絵集」について」〔語文論叢〕二〇一四年七月、8―16頁)
- 39 「十九世紀の絵入メデア―錦絵の〈填詞〉をめぐって―」〔国語と国文学〕二〇一五年二月、3―20頁)
- 40 「十九世紀における日本の出版文化」〔テキストとイメージを編む 出版文化の日仏交流〕二〇一五年二月、勉誠出版、49―72頁)

#### IV 資料紹介

- 1 「『観音利生孤館記伝 敵討枕石夜話』―解題と翻刻―」〔研究実践紀要〕〔明治学院東村山高等学校〕一九八一年六月、13―37頁)
- 2 「『敵討誰也行燈』―解題と翻刻―」〔研究実践紀要〕〔明治学院東村山高等学校〕一九八二年六月、9―37頁)
- 3 「『曲亭伝奇花釵児』―解題と翻刻―」〔研究実践紀要〕〔明治学院東村山高等学校〕一九八三年六月、20―50頁)
- 4 「『盆石皿山記』前編・後編―解題と翻刻―」〔研究実践紀要〕〔明治学院東村山高等学校〕一九八四年六月、一九八五年六月、3―28頁)
- 5 「『敵討連理橋』―解題と翻刻―」〔読本研究〕一九八七年四月、182―210頁)

- 6 『類集撰要』江戸出版史料の紹介―解題と翻刻―（『読本研究』一九八八年六月、81―111頁）
- 7 『荊萱後傳玉櫛笥』―解題と翻刻―（『説林』一九九一年三月、89―130頁）
- 8 『巷談坡堤庵』―解題と翻刻―（『愛知県立大学文学部論集（国文学科）』一九九三年二月、19―69頁）
- 9 『高尾船字文』―解題と翻刻―（『説林』一九九五年二月、59―99頁）
- 10 『八犬傳銘々誌畧』―解題と翻刻―（『説林』一九九六年三月、143―171頁）
- 11 『読本外題一覽』について（『読本研究』一九九六年一月、226―234頁）
- 12 『八犬傳銘々誌畧』第二集―解題と翻刻―（『人文研究』二〇〇一年三月、169―198頁）
- 13 『八犬義士誉勇猛』―解題と翻刻―（『人文研究』二〇〇三年三月、57―76頁）
- 14 『八犬伝もの銅版絵本二種』―解題と翻刻―（『人文研究』二〇〇四年三月、61―99頁）
- 15 『英名八犬士』（一）―解題と翻刻―（『人文研究』二〇〇五年三月、95―157頁）
- 16 『義勇八犬傳』―解題と翻刻―（『人文研究』二〇〇六年三月、195―241頁）
- 17 『恋娘昔八丈』解題（リプリント日本近代文学56『恋娘昔八丈』二〇〇六年四月、国文学研究資料館、1頁）
- 18 『英名八犬士』（二）―解題と翻刻―（『人文研究』二〇〇七年三月、213―270頁）
- 19 『英名八犬士』（三）―解題と翻刻―（『人文研究』二〇〇八年三月、19―79頁）
- 20 『笠つくしほめこと葉』について（『日本文化論叢』二〇〇八年七月、1―10頁）
- 21 『烟花清談』―解題と翻刻―（『人文社会科学学研究』二〇〇九年三月、13―50頁）  
\* 解題は及川季江氏執筆
- 22 『英名八犬士』（四）―解題と翻刻―（『人文研究』二〇〇九年三月、219―251頁）

- 23 「『英名八犬士』(五) — 解題と翻刻 —」(『人文研究』二〇一〇年三月、169—202頁)
- 24 「『當世八犬傳』 — 解題と翻刻 —」(『人文研究』二〇一一年三月、245—258頁)
- 25 「明治期合巻『里見八犬傳』 — 解題と翻刻 —」(『人文研究』二〇一二年三月、299—323頁)
- 26 「合羽摺草双紙『里見八犬傳』 — 解題と翻刻 —」(『人文研究』二〇一三年三月、179—203頁)
- 27 「『今様八犬傳』(一) — 解題と翻刻 —」(『人文研究』二〇一四年三月、199—250頁)
- 28 「『今様八犬傳』(二) — 解題と翻刻 —」(『人文研究』二〇一五年三月、187—236頁)

V その他

〔書評・展望〕

- 1 「〔書評展望〕江戸絵本研究の展望」(『日本文学』一九八七年二月、66—68頁)
- 2 「平成元年国語国文学界の展望 近世(散文)」(『文学語学』一九九一年一月、28—40頁)
- 3 「読本研究の50年と今後」(『讀本研究』一九九五年一〇月、64—71頁)
- 4 「〔書評〕鈴木俊幸著『蔦屋重三郎』」(『日本文学』一九九九年一〇月、70—71頁)
- 5 「印刷史研究会編『本と活字の歴史事典』(書評)」(『週刊読書人』二三五一号、二〇〇〇九月、4面)
- 6 「文学の末芸(書評『馬琴書翰集成』)」(『図書新聞』二六一六号、二〇〇三年六月、4面)
- 7 「草双紙を研究すること(研究史展望)」(『江戸文学』二〇〇六年一月、1—13頁)
- 8 「府川充男・小池和夫・小宮山博史・日下潤一・前田年昭・大熊肇『組版／タイポグラフィの廻廊』(書評)」

〔週刊読書人〕二七三一号、二〇〇八年三月、6面)

9 「小宮山博史『日本語活字ものがたり草創期の人と書体』(書評)」(『週刊読書人』二七八八号、二〇〇九年五月、2面)

10 「〔書評〕黄智暉著『馬琴小説と史論』」(『日本文学』二〇〇九年一月、84―85頁)

11 「〔書評〕播本眞一著『八犬伝・馬琴研究』」(『日本文学』二〇一一年二月、66―68頁)

〔各種報告書等〕

1 「近世後期小説と役者似顔絵―書誌情報活用の実際―」(『近世後期戯作―主に化政期合巻―に用いられた役者似顔絵の研究』(文部省科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書)一九九二年三月、55―62頁)

2 「奥谷蔵書調査と書誌データの処理について」(『近世後期における書物・草紙等の出版・流通・享受についての研究―木曾妻籠林家蔵書、及び、木曾上松臨川寺所蔵板木の調査を中心に―』(文部省科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書)一九九六年三月、95―102頁)

3 「近世より明治期初頭における読本の出版流通に関する通史的研究―読本書目年表の作成へ向けた書誌学的調査を中心に―」(『二〇〇一―二〇〇二年度科学研究費補助金基盤研究(C)』研究成果報告書、197頁)

4 「高井蘭山著編述書目(覚書)」(編著)(2006年3月『プロジェクト研究報告書』「近世出版文化史における〈雑書〉の研究」(千葉大学大学院社会文化科学研究科「研究プロジェクト報告集」133、二〇〇六年三月、83―108頁)

高木元先生を送る

- 5 「絵入本についての覚え書き」(『日本・中国・ヨーロッパ文学における絵入本の基礎的研究及び画像データ・ベースの構築』「科学研究費(基盤研究A)研究成果報告書」二〇〇六年三月、35―37頁)
- 6 「近世後期より明治期に至るまでの読本の出版流通関する書誌学的研究」(二〇〇三～二〇〇五年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書)(二〇〇八年三月、72頁)
- 7 「仮名垣魯文著作解題「切附本」の項目」(『原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究』(解題編・論考編・資料編)(二〇〇四～二〇〇七年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)(二〇〇八年三月、電子媒体)
- 8 「鄭成功の〈物語〉」(『北東アジアにおける「記憶」と歴史認識に関する総合的研究』(二〇〇六～二〇〇九年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告)二〇一〇年三月、93―96頁)
- 9 「『現存本の悉皆調査を通じた読本の出版流通に関する書誌学的研究』(二〇〇六～二〇〇九年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書)(二〇一〇年三月)
- 10 「近世近代を貫通する十九世紀小説史の構築へ向けた〈絵入小説〉の書誌学的研究」(二〇一〇～二〇一三年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書)(二〇一四年五月)

〔項目執筆〕

- 1 「『桜姫全伝曙草紙』」「曲亭馬琴」「小説の原稿料」「勸善懲悪」(『研究資料日本古典文学』第4巻 近世小説(一九八三年一〇月、明治書院、323―324、352―363頁))

- 2 「本文コラム」(語句評注) (少年少女古典文学館第22卷『里見八犬伝』、一九八三年八月、講談社)
- 3 「中沢道二」(『世界人物逸話大事典』(一九九六年二月、角川書店)
- 4 「天保2年」天保11年「天保12年」嘉永3年(共著) (『国文学』8月臨時増刊号『編年体古典文学』1300年史』一九八七年八月、學燈社、216—219頁)
- 5 「出版・書肆」「貸本屋」(『日本古典文学研究史大辞典』(一九九四年一月、勉誠社、908—914頁)
- 6 「阿波之鳴門」「以呂波草紙」「絵本鈴鹿森」「絵本三國妖婦伝」「絵本壁落穂」「小栗外伝」「棧道物語」「外題作者画工書肆名目集」「巷談坡堤庵」「小桜姫風月奇観」「信夫摺在原草紙」「俊傑神稲水滸伝」「自来也説話」「隅田川梅柳新書」「千代曩媛七變化物語」「鷲談伝奇桃花流水」「楠里亭其楽」「双蛺蝶白糸冊子」「鷲鞭」「盆石皿山記」「松浦佐用媛石魂録」「緞手摺昔木偶」「稚枝鳩」「催馬楽奇談」「小枝繁」「春夏秋冬春之卷」「大晦日曙草紙」「教草女房形氣」(『日本古典文学大事典』一九九八年六月、明治書院)
- 7 「切附本」「扉題」「扉書」「序題」「凡例題」「目錄題」「卷首題」「尾題」「奥題」「小口書」「背書」「前附」「後附」「題字」「序」「引」「原序」「初序」「自序」「他序」「緒論」「緒言」「題辭」「開題」「凡例」「目錄」「跋」「後序」「後書」「自跋」「他跋」「摺付表紙」「絵題簽」「書名」「副題」「角書」「小題」「外題」「添外題」「内題」「見返題」(『日本古典籍書誌学辞典』一九九九年三月、岩波書店)
- 8 「文学小辞典」「犬子集」「黄檗大藏経」「貸本屋」「官版」「古状揃」「御存商売物」「節用集」「板木屋」単著2001年3月(『週刊朝日百科世界の文学』84 日本Ⅱ〈近世の出版文化、色摺、古活字本〉(二〇〇一年三月、朝日新聞社、126—128頁)

高木元先生を送る

- 9 「娯楽読み物」の魅力―十返舎一九、式亭三馬、為永春水、《道中膝栗毛》ほか―（『週刊朝日百科世界の文学』88 日本Ⅱ〈南総里見八犬伝〉（二〇〇一年四月、朝日新聞社、248―250頁）

〔座談会〕

- 1 「座談会「江戸の出版（上）」板本」をめぐる諸問題」（『江戸文学』一九九六年五月、2―23頁。のち、『江戸の出版』（二〇〇五年一月、ぺりかん社）に再録） \*参加者―中野三敏・市古夏夫・鈴木俊幸
- 2 「座談会「江戸の出版（下）」板本」をめぐる諸問題」（『江戸文学』一九九六年一〇月、2―25頁。のち、『江戸の出版』（二〇〇五年一月、ぺりかん社）に再録） \*参加者―中野三敏・市古夏夫・鈴木俊幸
- 3 「討議2「書物の様式とメディア性―活版印刷によるその変容」（『日本の近代活字―本木昌造とその周辺』（二〇〇三年一〇月、近代印刷活字文化保存会、420―440頁） \*参加者―府川充男・雪嶋宏・鈴木広光
- 4 「座談会『八犬伝』再読」（『文学』二〇〇四年五月〈特集Ⅱ曲亭馬琴の遺産〉）2―22頁） \*参加者―柏木

隆雄・山田俊治・神田龍身

〔研究余滴〕

- 1 「閑話休題」（『近世部会会報』一九七八年一月、5―6頁）
- 2 「家の怪」（『近世部会会報』一九七九年一〇月、3頁）
- 3 「隠微なる構想―蛇と鳥の相克―」（『近世部会会報』一九八〇年一〇月、3頁）

- 4 「馬琴の綾足」(「近世部会会報一九八一年一〇月、8―9頁)
- 5 「『敵討枕石夜話』ノート」(「近世部会会報」一九八二年一二月、5頁)
- 6 「中本型読本の造本意識」(「近世部会会報」一九八三年一月、11―15頁)
- 7 「もう一人の南北」(「近世部会会報」一九八四年一二月、8―9頁)
- 8 「切附本瞥見―岳亭定岡の二作について―」(「近世部会会報」一九八六年六月、11―12頁)
- 9 「文学研究に於ける道具としてのパソコン」(「情報処理語学文学研究会会報」一九八七年七月、1―5頁。  
のち、「情報処理語学文学研究会会報累積版」一九九二年七月、18―23頁に再録)
- 10 「筆耕から作者へ―岡山鳥の場合―」(「近世部会会報」一九八八年四月、6頁)
- 11 「国文学研究に於けるネットワークの利用に就いて」(「情報処理語学文学研究会会報」一九八八年六月、  
5―7頁。のち、「情報処理語学文学研究会会報累積版」一九九二年七月、46―51頁に再録)
- 12 「機械可読テキストについて―テキストアーカイヴ概要―」(「情報処理語学文学研究会会報」一九八九年  
七月、34―45頁。のち、「情報処理語学文学研究会会報累積版」一九九二年七月、134―148頁に再録)
- 13 「江戸読本の出版をめぐる―出版文化史への視座―」(「北大国文学会創立四十周年記念・刷りものの  
表現と享受」一九八九年一二月、21―27頁)
- 14 「近世後期の出版界」(「日本古典文学会々報」一九九〇年一月、6頁)
- 15 「邪悪な機種依存文字コードについて〈再説〉」(「情報処理語学文学研究会会報」一九九〇年一二月(電子  
媒体)。のち、「情報処理語学文学研究会会報累積版」一九九五年三月、52―55頁に再録)

- 16 「メディアとしての〈本〉」〔「會報」(愛知県立大学・愛知県立女子短期大学国文学研究室) 一九九〇年二月、2頁〕
- 17 「機械可読テキストの処理―アプリケーションからツールへ―」〔国文学とデータベース・研究集会報〕一九九四年6月、24―41頁〕
- 18 「機械可読テキストと〈索引〉」〔情報処理語学文学研究会会報〕一九九五年一二月〔電子媒体〕
- 19 「江戸の出板事情」〔日本古書通信〕一九九六年一月、4―6頁〕
- 20 「シンポジウム―私の調査カード―」〔調査研究報告〕〔国文学研究資料〕一九九七年六月、36―48頁〕
- 21 「板本から活字へ」〔近代文学書誌協定会報〕一九九八年八月、6―10頁〕
- 22 「学術情報リポジトリと人文系基礎学」〔InfoPort〕〔千葉大学附属図書館〕二〇〇三年一〇月、5頁〕
- 23 「研究者にとってのセルフアーカイビング」〔情報の科学と技術〕二〇〇五年一〇月〕
- 24 「江戸読本の後摺本と活版本」〔「新日本古典文学大系」《明治編》28「国木田独歩・宮崎湖処子集」月報、二〇〇六年一月〕
- 25 「黄鳥墳の世界」〔国立劇場第255回歌舞伎公演(平成十九年十月)プログラム「平家女護島・昔語黄鳥墳」二〇〇七年一〇月、32―33頁〕
- 26 「デジタル環境下における国文学」〔日本古書通信〕二〇〇九年八月、10―11頁〕
- 27 「草双紙の〈明治〉」〔『新日本古典文学大系』《明治編》9「明治戯作集」月報、二〇一〇年二月、1―5頁〕
- 28 「襲名披露」〔「会報」(千葉大学文学部日本文化学会)、1―2頁〕

- 29 「〔切附本〕との出会い」(『日本古書通信』二〇一一年一月、10頁)
- 30 「浮世柄比翼稲妻のドラマツルギー作劇法」(国立劇場第281回歌舞伎公演〔2012年11月〕プログラム「浮世柄比翼稲妻」二〇一二年一月、18―19頁)
- 31 「パリに渡った和本たち」(『西日本新聞』二〇一四年八月二三日、一一面)
- 32 「『南総里見八犬伝』―重層化されるイメージ―」(国立劇場第69回邦楽公演「『八犬伝』を聴く」、二〇一四年一〇月、4―5頁)
- 33 「『南総里見八犬伝』の演劇性―享受の諸相をめぐって」(国立劇場第293回歌舞伎公演プログラム、二〇一五年一月、24―25頁)
- 34 「『されど文学部が日々』」(『会報』〔千葉大学文学部日本文化学会〕二〇一五年七月、2頁)